

林の底

宮沢賢治

青空文庫

「わたしらの先祖やなんか、

鳥がはじめて、天から降つて来たときは、

どいつもこいつも、みないち様に白でした。」

「黄金の鎌」が西のそらにかゝつて、風もないしづかな晩に、一ぴきのとしよりの梟が、

林の中の低い松の枝から、斯う私に話しかけました。

ところが私は梟などを、あんまり信用しませんでした。ちよつと見ると梟は、いつでも頬をふくらせて、滅多にしやべらず、たまたま云へば声もどっしりしてますし、眼も話す間ははつきり大きく開いてゐます、又木の陰の青ぐろいとこなどで、尤もらしく肥つた首をまげたりなんかするとこは、いかにもこゝろもまつすぐらしく、誰も一ぺんは欺されさうです。私はけれども仲々信用しませんでした。しかし又そんな用のない晩に、銀いろの月光を吸ひながら、そんな大きな梟が、どんなことを云ひ出すか、事によるといまの話のもやうでは名高いとんびの染屋のことを私に聞かせようとしてゐるらしいのでした、そんなはなしをよく辻棲のあふやうに、ぼろを出さないやうに云へるかどうか、ゆっくり聴いてみることも、決して悪くはないと思ひましたから、私はなるべくまじめな顔で云ひま

した。

「ふん。鳥が天から降ってきたのかい。

そのときはみんな、足をちぐめて降つて来たらうね。そしてみないちやうに白かったのかい。どうしてそんならいまのやうに、三毛だの赤だの煤すすけたのだの、斯ういろいろになつたんだい。」

梟ははじめ私が返事をしだしたとき、こいつはうまく思ふ壺つぼにはまつたぞといふやうに、眼をすばやくぱちつとしましたが、私が三毛と云ひましたら、俄にはかに機嫌きげんを悪くしました。「そいつは無理でき。三毛といふのは猫ねこの方です。鳥に三毛なんてありません。」

私もすつかり向ふが思ふ壺にはまつたとよろこびました。

「そんなら鳥の中には猫が居なかつたかね。」

すると梟が、少しきまり悪さうにもぢもぢしました。この時だと私は思ったのです。

「どうも私は鳥の中に、猫がはひつてゐるやうに聴いたよ。たしか夜鷹よだかもさう云つたし、鳥からすも云つてゐたやうだよ。」

梟はにが笑ひをしてごまかさうとしました。

「仲々ご交際が広うごわすな。」

私はごまかせませんでした。

「とにかくほんたうにさうだらうかね。それとも君の友達の、夜鷹がうそを云ったらうか
」

梶は、しばらくもぢもぢしてゐましたが、やっと一言、

「そいつはあだ名でさ。」とぶつ切ら棒に云つて横を向きました。

「おや、あだ名かい。誰の、誰の、え、おい。猫つてのは誰のあだ名だい。」

梶はもう足を一寸枝からはづして、あげてお月さまにすかして見たり、大へんこまつたやうでしたが、おしまひ仕方なしにあらん限り変な顔をしながら、

「わたしのでさ。」と白状しました。

「さうか、君のあだ名か。君のあだ名を猫ねこといつたのかい。ちつとも猫に似てないやな。」
なあにまるつきり猫そっくりなんだと思ひながら、私はつくづく梶の顔を見ました。

梶はいかにもまぶしさうに、眼をばちばちして横を向いて居をりましたが、たうとう泣き出しさうになりました。私もすっかりあわてました。下手へたにからかつて、梶に泣かれたんでは、全く気の毒でしたし、第一折角あんなに機嫌きげんよく、私にはなしかけたものを、ひやかしてやめさせてしまふなんて、あんまり私も心持ちがよくありませんでした。

「じつさい鳥はさまぎまだねえ。

はじめは形や声だけさまぎまでも、はねのいろはみんな同じで白かったんだねえ。それがどうして今のやうに、みんな変つてしまつたらう。尤も鷺や鶺鴒は、今でもからだ中まっ白だけれど、それは変らなかつたのだらうねえ。」

梟は私が斯う云ふ間に、だんだん顔をこつちへ直して、おしまひごろはもう頭をすこしうごかしてうなづきながら、私の云ふのに調子をとつてゐたのです。

「それはもう立派な訳がございます。

ぜんたいみんなまっ白では、

ずるぶん間ちがひなども多ございました。

たとへばよく雉子や山鳥などが、うしろから

『四十雀さん、こんにちは。』とやりますと、変な顔をしながらだまつて振り向くのが

ひはだつたり、小さな鳥どもが木の上にあるて、

『ひはさん、いらつしやいよ。』なんて遠くから呼びますのに、それが頬白で自分よりもひはのことをよく思つてゐると考へて、憤つてぷいっと横へ外れたりするのでした。

實際感情を害することもあれば、用事がひどくこんがらかつて、おしまひはいくら禿

驚しコルドンさまのご裁判でも、解けないやうになるのだったと申します。」

「いかにも、さうだね、ずるぶん不便だね。でそれからどうなったの。」

（あゝ、あの櫛ならの木の葉が光つてゆれた。たゞ一枚だけどうしてゆれたらう。）私はまるで別のことを考へながら斯うふくろふに聴きました。ところが梟はよろこんでぼつぼつ話をつゞけました。

「そこでもうどの鳥も、なんとか工夫をしなくてはとてもいけない、こんな工合ぐあひぢや鳥の文明は大ていこゝらでとまってしまふと、口に出しては云ひませんでした、心の中では身にしみる位さう思ひつゞけてゐたのでございます。」

「うんさうだらう。さうなくちやならないよ。僕らの方でもね、少し話はちがふけれども、語ことばについて似たやうなことがあるよ。で、どうなつたらう。」

「ところが早くも鳥類のこのもやうを見てとんびが染屋を出しました。」

私はやつぱりとんびの染屋のことだつたと思はず笑つてしまひました。それが少ふくろふうし梟ふくろふに意外なやうでしたから、急いでそのあとへつけたしました。

「とんびが染屋を出したかねえ。あいつはなるほど手が長くて染ものをつかんで壺つぼに漬つけるには持つて来いだらう。」

「さうです。そしていつたいとんびは大へん機敏なやつで勿論その染屋だつて全くのそろばん勘定からはじめましたにちがひありません。いつたい鳶は手が長いので鳥を染壺に入れるには大へん都合がようございました。」

あつ、私が染ものといつたのは鳥のからだだった、あぶないことを云つたもんだ、よくそれで梟が怒り出さなかつたと私はひやひやしました。ところが梟はずんずん話をつゞけました。それといふのもその晩は林の中に風がなくて淵のやうにひそまり西のそらには古びた黄金の鎌がかかり櫓の木や松の木やみなしんとして立つてゐてそれも睡つてゐないものはじつと話を聴いてるやう大へんに梟の機嫌がよかつたからです。

「いや、もう鳥どものよろこびやうと云つたらございませぬ。殊にも雀ややまがらやみそさざい、めじろ、ほゝじろ、ひたき、うぐひすなんといふ、いつまでたつても誰にも見まぢがはれるてあひなどは、きやつきやつ叫んだり、手をつないだりしてはねまはり、さつそくとんびの染屋へ出掛けて行きました。」

私も全くこいつは面白いと思ひました。

「いや、さうですか。なるほど。さうかねえ。鳥はみんな染めて貰ひに行つたかねえ。」
「えゝ、行きましたとも。鷺や駝鳥など大きな方も、みんなのしのし出掛けました。」

『わしはね、ごくあつさりとやって貰ひたいぢや。』とか、

『とにかくね、あんまり悪い色でなく、まあせいぜい鼠ねずみいろぐらゐで、ごく手ぎはよくやって呉くれ』とかいろいろ注文がちがつて居ました。鳶ははじめは自分も油が乗つてましたから、頼まれたのもう片っぱしから、どんどんどんどん染めました。

川岸の赤土の崖がけの下の粘土を、五とこ円くほりまして、その中に染料をとかし込み、たのまれた鳥をしつかりくはへて、大股おほまたに足をひらき、その中にとつぷりと漬けるのでした。どうもいちばん染めにくく、また見てゐてもつらさうなのは、頭と顔を染めることでした。頭はどうにか逆さかまにして染めるのでしたが、顔を染めるときはくちばしを水の中に入れるのでしたから、どの鳥もよつほど苦しいやうでした。

うっかり息を吸ひ込まうもんなら、胃から腸からすつかりまっ黒になつたり、まっ赤になつたりするのでしたから、それはそれは氣をつけて、顔を入れる前には深呼吸のときのやうに、息をいっばいに吸ひ込んで、染まつたあとでももうとても胸いっばいにたまつた悪い瓦斯ガスをはき出すといふあんばいだったさうです。それでも小さい鳥は、肺もちひさく、永くこらへて居れませんでしたから、あわてて死にさうな声を出して顔をあげたもんだと申します。こんなのはもちろん顔が染まりません。たとへばめじろは眼のまはりが染まら

ず、頬ほほじろは両方の頬が染まつて居りません。」

私はこゝらで一つ野次やじつてやらうと思ひました。

「ほう、さうだらうか。さうだらうか。さうだらうかねえ。私はめじろや頬じろは、自分からのんであの白いところは染めなかつたのだらうと思ふよ。」

梟ふくろふは少しあわてましたが、ちよつとうしろの林の奥の、くらいところをすかして見てから言ひました。

「いゝえ、そいつはお考へちがひです。たしかに肺の小さなためです。」

こゝだと私は思ひました。

「さうするとどうしてあんなにめじろも頬白も、きちんと両方おんなじ形で、おんなじ場所に白いかたが残つてゐるだらうね。あんまり工合ぐあひがよすぎるよ。息がつゝかないでやめたもんなら、片っ方は眼のまはり、あとはひたひの上とかいふ工合に行きさうなもんだねえ。」

梟はしばらく眼をつむりました。月光は鉛のやうに重くまた青かつたのです。それからやつと眼をあいて、少し声を低くして云ひました。

「多分両方べつべつに染めましたでせう。」

私は笑ひました。

「両方別々なら尚なほさら更をかしいぢやないかねえ。」

梶はもうけろつと澄まして答へました。

「をかしいことはありません。肺の大きさははじめもあとと同じですから、丁度同じところに息が切れるのです。」

「ふん、さうだらう。」私は理くつは尤もつともだ、うまく畜生に遁げたなど心のうちで思ひました。

「こんな工合で。」梶は云ひかけてぴたつとやめました。どうも私にいまやられたのが、しやくにさはつてあともう言ひたくないやうでした。すると今度は又私が、梶にすまないやうな気になりました。そこで言ひました。

「そんな工合でだんだんやつて行つたんだねえ。そして鶴つるだの鷺さぎだのは、結局染めなかつたんだねえ。」

「いゝえ。鶴のはちゃんと注文で、自分の好みの注文で、しつぽのはじだけぼっちより黒く染めて呉れと云ふのです。そしてその通り染めました。」

梶はにやにや笑ひました。私は、さつきひとの云つたことを、うまく使ひやがつたなど

は思ひましたが、元来それは鼻をよろこばせようと思つて云つたことですから、私もだまつてうなづきました。

「ところがとんびはだんだんいゝ気になりました。金もできたし気ぐらゐもひどく高くなつて来て、おれこそ鳥の仲間では第一等の功労者といふやうな顔をして、なかなか仕事もしなくなりました。尤も自分もつとは青と黄いろで、とても立派な縞しまに染めて大威張りでした。

それでもいやいや日に二つ三つはやつてましたが、そのやり方もごく大ざっぱになつて来て、茶いろと白と黒とで、細こまかいぶちぶちにして呉れと頼んでも、黒は抜いてしまつたり、赤と黒とで縞にして呉れと頼んでも、燕つばめのやうにごく雑作なく染めてしまつたり、實際なまけ出したのでした。尤もそのときは残つたものもわづかでした。鳥からすと鷲さぎとはくてうところの三足びきだけだったのです。

鳥は毎日でかけて行つて、今日こそ染めて貰もらひたい今日こそ染めて貰もらひたいとしきりにうるさくせつきました。

明日にしろよ、明日にしろよ、と鷲とんびがいつでも云ひました。それがいつまでも延びるのです。

鳥が怒つて、たうとうある日、本気に談判をしたのです。

『一体どう云ふ考だ。染屋と看板がかけてあるからやって来るんだ。染屋をよすならきちんとやめてしまふがい。何日たつても明日来い明日来いぢやもう承知ができない。染めるんならもうきつと今すぐやって呉れ。どっちもいやならおれも覚悟があるから。』

鳶はその日も眼を据ゑて朝から油を呑んでゐましたが斯う開き直られては少し考へました。染屋をやめても、金には少しも困らんが、たゞその名前がいたましい。やめたくもない。けれどもいまごろから稼かせぎたくもないしと考へながらとにかく斯う云ひました。

『ふん、さうだな。一体どう云ふふうに染めてほしいのだ。』

烏は少し怒りをしづめました。

『黒と紫で大きなぶちぶちにしてお呉れ。友禅模様のごくいきなのにしてお呉れ。』

とんびがぐつとしゃくにさはりました。そしてすぐ立ちあがつて云ひました。

『よし、染めてやらう。よく息を吸ひな。』

烏もよろこんで立ちあがり、胸をはって深く深く息を吸ひました。

『さあいゝか。眼をつぶって。』とんびはしっかり烏をくはへて、墨すみつぼ壺の中にぎぶんと入れました。からだ一ぱい入れました。烏はこれでは紫のぶちができないと思ってばたばたばたしました。がとんびは決してはなしませんでした。そこで烏は泣きました。泣い

てわめいてやつとのことで壺からあがりはしましたがもうそのときはまつ黒です。鳥は怒ってまつくろのまま染物小屋をとび出して、仲間の鳥のところをかけまはり、とんびのひどいことを云ひつけました。ところがそのころは鳥も大ていはとんびをしゃくにさはってましたから、みな一ぺんにやつて来て、今度はとんびを墨つぽに漬けました。鳶はあんまり永くつけられたのでたうとう気絶をしたのです。鳥どもは気絶のとんびを墨のつぽから引きあげて、どつと笑ってそれから染物屋の看板をくしゃくしゃに碎いて引き揚げました。

とんびはあとでやつとのことで、息はふき返しましたが、もうからだ中まつ黒でした。

そして鷺とはくてうは、染めないまゝで残りました。」

梟ふくろは話してしまつて、しんと向ふのお月さまをふり向きました。

「さうかねえ、それでよくわかつたよ。さうして見ると、おまへなんかはまあ割合に早く染めて貰もらつてよかつたねえ、なかなか細こまく染まつてゐるし。」

私は斯かう言ひながらもう立ちあがりその水銀いろの重い月光と、黒い木立のかげの中を、ふくろふとわかれて帰りました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

林の底

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>